

味がどれ程作者の詩人らしい面影を見せてゐるであらうか。氏には斯うした癖がよく見受けられる。「……と疊みかけた妙味」といつたやうな評語は氏の著者の多くに於て見られるけれど「……と疊みかけた語句の配置」が、どれ程作品全體を引立たしむるに役立つて居るかといふことを明に示して居られないことが多い。殊に此處の批評の如きは、それこそ技巧たつぷりで、私は原作者の文にも甚だしく誇張のあるのを感じるが、それ以上に誇張されてゐると思ひます。「興趣更に盡くすることを知りません」は、恰も氏が上の空で言つて居られるやうにさへ感ぜられる。「七砲臺邊波穩やかにして高く低く群飛ぶ鷗云々」に對しては、「波靜かな東京灣の風光が見るやうです」と評して居られるだけであるが、此の評語は抽象的である。無論氏は其次に「七砲臺は云々」と云つて居られるけれども、これは本文に對して言つて居らるゝのではなくて、七砲臺邊の光景を、氏自身に述べて居らるゝのである。此の段に於て、「落花の風にひるがへるに似たり」の如きは、表現が誇張されてゐます。そして一般的であつて必ずしも東京灣のみの持つ特色ではない。而して東京灣だといふことを表したのは、「房總二州の山は霞に消えて探れど見えす」であつて、これには、ぼうつと霞んで東京灣の春の趣が割

合に描き出されてあると思ひますが、友納氏の文では、さうした點についてはどう思つて居られるかわからない。「松青き處、色どり添ふるに桃の紅なるを以てす云々」にしても、氏は「箱根足柄の峠を越えて御殿場沼津附近の風光をまるで詩のやうな麗筆で美しく描き出して居ます」と言つて居らるゝのみである。此の「まるで詩のやうな麗筆で」とは一體どうした意味なのだらう。「流石に詩人」と氏の言はれる大和田建樹が、散文の形式で書いた此の一文は、詩にした方がよかつたであらうか。私は、此の詩の意味が鐵道唱歌式のものの意味するとすれば、却つて詩でなかつた方がよかつたと思つてゐる。友納氏の文の調子からすると詩は美しく詠む所に價值があるかのやうに感ぜられるが、詩とは、必ずしも事物を美化して表現することではないと思ひます。此處でも氏は「全文殆ど對句によつて成り、句を重ね、文を疊んで明媚な風光を宛かに描き出したあたり、眞に光景目睹です」とつけ加へて居らるゝが、「句を重ね、文を疊んで」とは何を意味するか。「句を重ね文を疊んで」あるために明媚な風光がどれ程生々とはらはされてゐるであらうか。「眞に光景目睹です」といふ氏獨特の評語を下されるのに對句がどんな効果を有つてゐるのであらうか。「自然は是等の美を贈りて

旅客を慰め、詩人は其の美を詠して春に謝せんとす」の如きは矢張り抽象的であり、「藤澤の野、山北の谷、人々唯美しと叫ぶ」も、又抽象的であつて、何等、此の邊の特色は出て居ない。「人々唯美しと叫ぶ」では「光景目睹」といふことに値しないやうに思はれる。「三保の松原云々」の所でも友納氏は、單に原文の文體を變へて言つて居られるだけのやうにも見える。此處では「磯にくだけて折れかへる波云々」を「何物かの造化妙筆に漏れん」とは聊か不釣合である。斯かる景色は、別に三保の松原附近に限つたことではありません。唯、斯かる眺めが、此の邊獨特の趣を持つた點を表現してこそ「造化の妙筆に漏れん」といふ言葉と釣合つて來るであらうと思ひます。しかし「近き舟は行けども、遠き帆影は動かんとせす。遠くかすかに横はれるは伊豆黄なり」の如きも、「綠麥黃菜果しもない尾張平野の風光を叙してゐます」では、何も文章の本質にはふれてゐません。此處は「平原十里」が重要であつて、これがあるから「麥は綠菜の花は黄なり」も稍特殊な味を持つて來るのであります。「熱田の社を左に見て云々」も此の「平原十里」を背景に置いてこそ意義あるものとなつてゐます。

然るに友納氏は、讀本の文を引いて置き乍ら、其の文其の物にはあまりふれず、實際の名古屋附近の有様を説明し、「ひろびろとした平原の間を縫ふて、左に熱田の森を迎へ、右に名古屋の城を眺めた氣持は又一段です」と、自分の感じを述べて居られる。即ち初めに大和田建樹の文を出して置いて、何時かその文を離れ、自らの感想を述べるのが目的でもあるかのやうに思はれる。此の事は前にも度々述べて置いたが、これは友納氏の著書に現はれた、共通的な態度のやうであります。「彦根去り、草津來り云々」が汽車の進行を思はせるのは私も同感出來る。これは句を重ねた手法が相當に効果をあらはして居る。前の「松青き云々」よりも却つて利いてゐる。

二の文に對しては友納氏は、單に解釋乃至は説明を加へて居られるだけであつて、殆んど文の良し悪しには觸れて居られない。我々は、氏の土地に關する説明は、參考になることが多いと思ふけれども、本課が文學的教材である以上、單なる説明のみでは物足りない氣がする。そこで今度は野澤氏の著書について考へて見よう。

野澤氏の教材の研究も亦友納氏のものと同小異であつて、用語にも似通つた所があることは、前に既に述べて置きました。殊に一の文に於ては、友納氏の文について

言つたことが其の儘野澤氏のものにも當嵌まる位でありますから、私は主として二の文に就て言つて見たい。先づ「大原女も何時か我が友となれり云々」に對して、氏は「無量の親しみがある」と云つて居られるが、これは色々の意味にとられます。即ち大原女に對する作者の心持の中に無量の親しみがあるといふ意味にも考へられるし、此の文を透して京都に親しみを持つことが出来るといふ意味にも思はれます。けれども吾々は、作品を讀むに當り作者の心持を重んずることを忘れてはならない。「花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を見る客云々」を、氏は「寧ろ前句に花見時の人心の眞姿があらう」と云つて居られるが、此處はむしろ「花時の清水觀音に詣る人の心持が、佛に詣でる氣持が主となつてゐるか、花を觀たい心持が主となつてゐるか、かわらないやうなものであらう」といふ心持を含めて作者は書いて居るのではなからうかと思ひます。だから必ずしも「前句に花見時の人心の眞姿がある」とまで片方を強く考へる程のことはないやうであります。野澤氏も友納氏も言及してゐないが、「わらび餅召せ」など呼ぶ所には、却つて古典的な氣分がたゞよつて居はしないかと思ひます。「讀經の聲遠く響きて」の如きも、野澤氏は「本當にその静閑な清美な境地が如實に

描かれて居る」と言つて居らるゝだけであるが、實は京都の特殊な情調がにじんでゐるやうに思はれます。但し、讀經の聲を「遠く響きて」は少し強すぎる。此處は野澤氏のやうに「静閑な境地」といふ感じを現はしたものと思へば、思はれぬでもないがしかし遠く響きては、作者の想像であらう。此の時の作者の位置を清水觀音のあたりと考へて、讀經の聲が遠くから聞えて來るのなら幽かに聞えて、遠いなと作者に推定される筈だし、作者の近くで讀經の聲が聞えるのなら、遠く響くだらうと作者が想像するのである。兎に角、遠く響きては、稍々妥當を欠いてゐるやうであります。「清水の塔も半ば隠れぬ」の一句は、野澤氏の述べて居られる通り「蒼然たる暮色が彼方から流れ來つた」有様をよく現はして居る。但しこれは「暮色が東山を罩め、叡山を廻り、漸う加茂川におそひ來れり。清水の塔も半ば隠れぬ。大文字の跡も姿を隠しぬ」とつゞけて讀むと、暮れ行く時間の推移も味はれて一段と面白い。併し最後に野澤氏が、全文の概評とも覺しく「本當に艶麗な文字、優雅な文章である。當時の讀書子の血を沸かせ、愛讀惜く能はざらしめた名篇たるに相違ない」といつてゐられるのは、如何なる意味なのか。「當時の讀書子の云々」に就ては問題はないが、「名篇たるに相違

ない」とは、野澤氏も名篇として居らるゝやうに思はれるが、「艶麗な文字、優雅な文章なるが故に名篇である」と言はるゝのならば、私は異見をさしはさみ度い。「優雅な文章」は暫く措き「艶麗な文字」を使つてあるからとて必ずしも名篇と云はる可きものでないと思ひます。

二五 鳥の聲 (高等小學讀本卷三、第四課)

友納氏

虚子はほととぎす派の俳人で、正岡子規の始めた寫生文から出發して小説を書き出した人です。子規は俳句及び短歌の革新者として明治文壇の殊勳者であります。文章にも寫生文の一派を開き従來の文章が事實を疎かにして、唯々文章を弄ぶを主としてゐたのに対して、文章の修飾などはどうでも宜い、見た儘を忠實に細に寫せよと説いて、文章の方面から自然主義の機運を拓いた人であります。自然主義文學の一つの特色に、文章の上に修飾を退けたと云ふことで、田山花袋の自然主義を開くや、先づ「露骨なる描寫」を主張し、無技巧と言ふことを説きましたが、子規はそれ以前に於て既に無技巧の説を成してゐました。勿論無技巧と云つても全

く技巧を無くすると云ふのでありません。従來の美しく修飾しようとする技巧に加ふるに、眞實に迫るが爲の技巧を以つてしたのであります。眞實を描け、ありの儘に、見た儘に描けと云ふことを先づ教へたのは實に子規で、子規が開いたほととぎすの寫生文家として、子規自身に次いで重きをなしたのは、虚子及び寒川鼠骨、坂本文泉等であります。眞實を寫す態度に於て、寫生文派は自然主義と異りませんが、併し根本の精神に於て自然主義者とは違つてゐました。矢張り低徊趣味で、此の低徊趣味と云ふのは、つまり一種の俳諧趣味であつたのであります。虚子には短篇集「鷓頭」の外、代表作とすべき長篇「俳諧師」があります。是れは従來斷片的な事柄のみ描いた寫生文を長篇小説に應用して、薄命なる一俳諧師の悲愴なる生涯を描いたもので、當時を動かしたものでした。此の「比較の鳥」も自然主義文學の代表作として、所謂寫生文の好適例といつて然るべきものでありませう。教材は僅に一二箇所修正しただけで、殆ど原文其儘です。

「寢床を出ると、琵琶湖の見える部屋に行つて見る云々」

冒頭の一段には、時と場所とを描いてゐます。季節は春のなかば、所は比較山の宿の一室、筆者は今起きたばかりで、朝日は部屋一杯に差込んでゐます。總てが晴れやかな山上の氣持ちで、静寂の氣が至るところに盛り上つてゐます。

教材には琵琶湖だけが示されて、此の文で一番大切な比較山の名が省かれてゐます。併し琵琶湖が見えたと云つたあたりから考へましても、又原文に付て調べて見ましても、此の文の背景となつてゐる場所は比較山です。ですから、此の文を玩味するには、どうしても先づ第一に、其の舞臺となつてゐる比較山其のものを明か

にして置かれはなりません。比叡山は京都市の東方、山城近江の國境に峙つてゐる名山で、比叡山脈の主峯です。山嶺が二つの峯に分れて聳立してゐまして、其の最高峯たる四明嶽は海拔二千七百十六尺、東に琵琶湖を見下し、西南に京都市の紛壁を指し、淀川の清流、又鴨目の中に集つてゐます。山の東側には古杉喬松鬱然として谷を埋め、山氣自ら爽快なるを覺えます。山中亦名所舊蹟に富み、四明嶽の東北側には延暦寺及び之れに屬する天臺の諸寺堂塔頗る多く、世に三院九院と稱し、又十六谷の稱もあります。此の文の筆者が琵琶湖を見下したと云ふのは、山の東側にある旅館の一室で東に琵琶湖を見下し、西南遙に京都を眺める頗る景勝の地を占めてゐます。

「湖水と思はるゝ邊は、雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見下したのと似た景色だ、云々」前半は山上の見晴しで、自然描寫が小氣味の好い位に冴えてゐます。「我が目よりや、高くや、低く、數知れぬ杉のこずみがほこのやうに、云々」の邊りから「のこぎりの齒のやうな杉を背に並べて、湖水の方に流れてゐる、云々」の邊りにかけて、煙波洋々たる雲界の中に、黒く浮き出した杉木立の有様が見えるやうです。斯うした背景の中に、高く低く鳴りかはす鳥の聲を如實に描き出した筆致の巧妙さは何とも言へません。「前は小鳥の聲が縦線なら、此の小鳥の聲は横線だ、云々」のあたり、鳥の鳴聲の印象が鮮かに浮き出てゐます。是は總て次に來る「前の二つの小鳥が織成した美しい絹を、唯一聲に引割いたのかと疑はれる、云々」の伏線ともなるべきもので、雲の聲を「絹に置かれるかすりの様に美しい。一のかすりが置かれると、又縦線を織つて、云々」と具象化し、美化して遂には「縦線が鳴く。横線が鳴く」と押詰めた手法は、如何にも深山や幽谷

に住んでゐる諸鳥の錯綜した階調としくり合つてゐます。

「琵琶湖の上には、まだ漠々たる白雲が漂うてゐる、云々」

冒頭の「寢床を出ると、云々」と相應じ、時間的經過を想像させたあたり、確に寫生文の要を得たものと云へませう。鳥の聲に聴き惚れて、うつとりしてゐた筆者は、總て我に還つて邊りの景色に目を移したのであります。一面の雲界が次第に薄らいで、段々と眼界が開けて來る有様が見るやうです。

「漠々」は廣々とした有様の形容です。——（友納友太郎氏著高等小學讀本の眞使命卷三）——

野澤氏

一、本文は高濱虚子の作で、原文は「比叡山の鳥」と題してかいてある。内容は一二箇所修正しただけで殆ど原文其の儘である。

二、一篇は三節に分れてゐる。第一節はその冒頭で、場所が書かれてある。即ち琵琶湖の見える比叡山の旅館の一室である。

「朝日が部屋一ぱいにはいつてゐる。」

簡短な表現ながらも、山上の朝の爽かな氣分が豊餘に漂うてゐる。

三、第二節は本文の中心生命のある所で、二つに分れる。即ち前半は山上の見晴しで、後半は諸鳥の錯綜した階調の寫生である。

「湖水と思はる、邊は、雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見下したのと似た景色だ。」
平地の風物がまだ淡々たる白雲に蔽はれて静かに眠つてゐる所だ。

「部屋の下は東谷で、我が目よりやゝ高くやゝ低く、數知れぬ杉のこずゑがほこのやうに突立つてゐる。左手には、北谷の向ふに當る峯がのこぎりの齒のやうな杉を背に並べて、湖の方に流れてゐる云々。」
漣波洋々たる中に、浮き出した彼方、此方の杉木立の有様が本當に如實に描かれて居る。「杉のこずゑがほこのやうに突立つ云々」、「のこぎりの葉のやうな杉を云々」は實に如實だ。「……湖の方に流れてゐる」は堅い針の杉を、鋭い鋸の葉を柔かくしてゐる。巧妙な筆致だ。

「非常に静かだ。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えぬ。」
何といふ静寂な境地やら。かうした境地に、

「其處の杉のこずゑで一羽鳴いてゐる。向ふの杉のこずゑで他の一羽が答へてゐる。又遙か向ふの谷深く他の一羽が應じてゐる。よく耳を澄ますと、尙二三羽の聲が何處かで聞えてゐるやうだ。」

「此の小鳥の合奏を破るやうに、他の聲の小鳥が突然其の間に高音を張る……其の音の空山に響く趣が何ともいへぬ。……それも一羽ではない。三羽、四羽と聞く中にだん／＼殖えてくる云々。」
といふやうに、可愛い小鳥が、麗々しい小鳥が、相呼應して囀つてゐる所は、本當に自然の大樂堂に於ける自然の大管絃樂だ。

「前の小鳥の聲が縦線なら、此の小鳥の聲は横線だ。互に入りまじつてよく調和を保つところがおもしろい。」

「眞先に其の静かさを破るものは雲の聲だ。網に置かれるかすりのやうに美しい。」

「一のかすりが置かれると、又縦線を織つて前的小鳥が鳴く。又横線を織つて次的小鳥が鳴く。かすりが鳴く。縦線が鳴く。横線が鳴く云々。」

かうした書振りは所謂具體の表徴化で、自然の聲をかく美化した所に何とも旨へぬ妙趣がある。本當に巧妙な筆致だ。

「或は山鳥であらうか。……しかし暫くして其の聲は谷の底の底、峯の奥の奥にしみ込んでしまつて、其の後は元の通り静かになる云々。」

小鳥の織成した美しい網を、唯一聲で引割いた其のけたましい山鳥の聲が、だん／＼に奥へ奥へとしみ込んで行つて元の静寂に復歸する所は本當にいゝ。

「他の鳥が皆高調で囀々とした中に、獨り低調で不平らしい音を出すのがおもしろい。一人の友はきつ／＼きだらうといった。他の友は山鳩だらうといった。」

他は上で高調に、自分は下で低調に、他は愉快らしく、自分は不平らしく鳴く所、何だかそこに人世に對する諷刺でもあるやうに思はれる。

「琵琶湖の上には、まだ淡々たる白雲が漂つてゐる。杉のこずゑを流れる霞は少しづつ薄らいで来て、だんだんと谷が深く見えてくる。」

こゝは鳥の聲に聴き惚れて、うつとりしてゐた作者が、やがて自己意識に還つて邊りの風光に目を移した所

だ。琵琶湖はまだ渾々たる白雲に閉ざれてゐるが、杉の梢を流れる霞はだん／＼に薄らいで、谷も次第に深まつて来るこの自然の姿態には、實に旨ふに旨はれない景趣が漂うてゐる。

要するに本文は優れた筆致によつて山間の景趣を、諸鳥の階調を如實に清新に寫してゐる。寫生文としては本當に上乘の一つであらう。——（野澤正浩氏著高等小學讀本指導書卷三）——

評論

友納氏の意見は可なり穩當なものであると思ひます。併し氏が自然主義について述べられた所に「無論無技巧と云つても全く技巧を無くすると云ふのではありません。從來の美しく修飾しようとする技巧に加ふるに、眞實に迫るが爲の技巧を以てしたのであります。」は、間違ひであらう。何となれば、一體自然主義の特徴は眞實を描くにあつたことは無論であるが、その結果從來の擬古主義乃至はロマンチズムの反動を受けて、著しく人生の醜を描くことに陥つて、此處に又一の大なる特徴を作つてゐるのも事實である。殊に花袋氏などは「美しく修飾しようとする」ことには理論的にも、實際的にも反對してゐるのである。尤も花袋氏が自然主義運動に移る前に書いた

「草枕」といふ紀行文などには餘程誇張もあり美しく修飾した所もあるが、彼の唱へた所の自然主義では、從來の美しく修飾しようといふ態度は、むしろ排斥はしてゐるが、それを取入れようとはしてゐない。唯時として、從來の傳統的な作風が禍して、斯かる態度が混入してゐる部分が、いくらあつたにしても、それをいゝことに思つてゐたのでないことは明である。氏が子規一派の寫生文を自然主義とは別なものであると云はれたのは無論の事であるが、此の課の原文を「自然主義の代表作として所謂寫生文の好適例といつて然る可きでありませう」といつて居られるのはおかしい。寫生文の好適例ではあらうけれど、自然主義の代表作ではあるまい。此のことは野澤氏の批評と一緒に述べる。氏の「總てが晴やかな山上の氣持ちで、靜寂の氣が至るところに盛上つてゐます」は私にも肯けることである。しかし、氏は文章を概括的に見て批評して居れる。此の弊は、氏だけに限られたことではなくて、多くの評者が陥つてゐる所である。氏の文に於て、其の背景や、實際の場所について述べて居らるゝ點は甚だ参考にもなるであらうが、氏が文其の物については、上述の通り單に概括的評言を下すに止めて居られるのは、誠に物足りない。私の考へからは、「部屋の下は東谷で、

我が目よりやや高くや、低く、數知れぬ杉のこすゑがほこのやうに突立つてゐる。左手には、北谷の向ふに當る峯がのこぎりの齒のやうな杉を背に並べて、湖の方に流れてゐる」の如きは、自然描寫がうまいと思はれるけれども、その中には又表現の適切でない所も見受けられるやうである。即ち「杉を背に並べて」といふ表現に對して「湖水の方に流れてゐる」とあるのは、感じの上に於て齟齬して居るやうに思はれてならない。「背に並べて」と云ふからには、山の一面で、それは作者の位置からは一列か二列か兎に角幅の廣い山の一面ではなくて、細い一線が湖の方に段々低くなつてゐるといふ感じを與へるのに「流れて」と云へば、幅廣い一側面が、湖の方へ次第に低くなつてゐるやうに感ぜられる。これは、感じの上に矛盾があると思ふ。斯くの如く一文の中には、大體表現がうまくても、その中には、何等かの欠陥も有するものかと思ふのに、評者一流の讚辭で一般的に片づけてしまふのは如何なものかと思ひます。（我が目よりやや高くや、低くの所を私は曾て原文に「やや高く」の一語がないかのやうに言つたことがあるけれども原文にも「やや高く」の語がついてゐるから、序に此處で訂正して置く。）煙波洋々たる雲界の中に、黒く浮き出した杉小立の有様が目に

見るやうです」の評言は、當らないではないが、これ丈の評言では、大體論であつて文の鑑賞には、大して役に立たぬではなからうか。

小鳥の鳴き聲について、氏は「前の小鳥の聲が縦糸なら、此の小鳥の聲は横糸だ、云々」のあたり、鳥の鳴聲の印象が鮮かに浮き出てゐます」と云つて居られるけれども、小鳥の聲の印象はむしろ「前の小鳥の聲云々」より前に於て印象が鮮かなのであつて、こゝはそれらの印象を概括して述べた説明になつてゐる。私は「杉のこすゑで一羽が鳴くと、向ふの杉のこすゑで他の一羽が答へる。又遙か向ふの谷深く他の一羽が應ずる。而して其の間に、高音を張り上げる他の小鳥の聲がきこえ、それらが錯綜してゐる」といふ所に却つて小鳥の鳴聲が、髣髴してゐると思ふ。而してこれを「縦糸と横糸」に見立てたのは、鳴聲の錯綜してゐることを譬へたものであつて、小鳥の印象を浮き出させようとしたのではないと思ふ。氏は「一のかすりが置かれると、又縦糸を織つて、云々」と具象化し、美化して遂には「縦糸が鳴く。横糸が鳴く」と押詰めた手法は、如何にも深山や幽谷に住んでゐる諸鳥の錯綜した諧調としつくり合つてゐます」と言つて居られるが、是は、所謂「思ひ付」であつて、「縦糸が鳴く。横糸

が鳴く」は、この文の前の部分程「諸鳥の錯綜した諧調としつくり合つてゐる」とは云はれないやうである。むしろ錯綜した小鳥の諧調を抽象的にしてしまつてゐるさうひがある。此處は、前の小鳥の描寫があつてこそ是認せらる可き部分であるのに、氏が、反對に小鳥の描寫の所は何とも言はずに、却つて縦絲横絲に力を入れてゐられるのは、意外である。

野澤氏の評言は、殆ど友納氏のものに一致してゐると云つていい。用語までも似通つてゐる。だから、多くは友納氏の文について言つたと同様かと思ふが、極くざつと卑見を述べて置くことにする。「煙波洋々たる中に、浮き出した彼方、此方の杉木立の有様が本當に如實に描かれて居る」は大體友納氏の評語と似てゐるが、「……湖の方に流れてゐる」は堅い鋒の杉を、鋭い鋸の葉を柔かくして居る」といふ意味ははつきりしない。是によれば恰も作者が此の景色を寫すに當り「あの鋒の杉は堅く感じられるし、のこぎりの葉のやうな杉は、鋭い感じがするから少し柔かくしてやれ」と考へ、勝手に手可減をして書いたもののやうに思はれる。しかも野澤氏は「巧妙な筆致だ」とほめて居られるが、それでは寫生文の意義にも反し、又眞實があらはれてゐないこ

とになつて、一面には又斯かる態度がいゝといふことになるではないか。野澤氏が斯かる態度をとつて居られるのは、此處ばかりではない。「……かすりが鳴く。縦絲が鳴く。横絲が鳴く」の所でも「かうした書振りは所謂具體の表徴化で、自然の聲をかく美化した所に何とも言へぬ妙趣がある。本當に巧妙な筆致だ」と言つて居られる。「縦絲横絲云々」は自然の眞實の聲を作者があらはさうとしたのではなくて、美化したのであらうか。そしてそれが巧妙な筆致なのだらうか。

「非常に静かだ。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えぬ」について、「何といふ静寂な境地やら。……」といつて居らるゝのは、別に大したことではないが、此處では表現が少し大げさすぎるやうである。本文に於ては「さびしい氣持」よりもむしろ「しづかな朝の氣持」を作者は出さうとしてゐるのだらうが「自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えぬ」といふ句はいくらか氣味の悪い感じをも伴つてゐるから、讀者としては「うき世の物音」によく注意しなければならぬ。

此の文は、文章史的に眺めては、大に意義のあるものである。それは「寫生文」が從來の日本の文章の誇張的書き振りを打破したものであるからである。しかし、今の

眼から見れば、それ程づぬけていゝ文とも言はれない。何となれば、此の文は、自然を其儘寫さうとしてゐるからである。しかし、作者には矢張り従來の「文を作る」といふ習慣が残つてゐる。だから一見氣のきいたやうに見えて、實はしつくりしないといつたやうな表現がある。例へば作者の云ふ前の小鳥に對し他の小鳥といつてゐる鳥の鳴き聲を、作者は「小鳥の合奏を破るやうに……高音を張る」といつてゐながら次には「前の小鳥ほど優しい聲ではないが」などと斷つてゐる如きがそれである。「破るやうに」といふ表現は例へ破られるものが小鳥の合奏であつたにしても、小くとも優しい感じではない。しかし「前の小鳥ほど優しい聲ではないが」といふ表現は、表面的には「優しい」といふことを打消してゐるやうだけれども、實は相當に「優しい」只前の小鳥程に優しくはない」といふ語感を含んでゐるのである。所が作者は、優しさを前の小鳥とくらべる程の小鳥の聲を、「此(前)の小鳥の合奏を破るやうに」と表現してゐるが如きは、表現が妥當でない。私が「しつくりしない」といふのはそのことである。以上で大體本課に對する考へは述べたつもりであるが、最後に寫生文に就いて誤解を防ぐ爲に一寸つけ加へて置く。野澤氏は、「附設」といふ見出しの下に「高濱

虚子はほとゝぎす派の俳人で、正岡子規の始めた寫生文から出發して小説を書き出した人だ。子規は俳句及び短歌の革新者として明治文壇の殊勳者であるが、文章の方に於ても寫生文の一派を開いた人で、従來の文章が事實を疎にし、唯文章を弄んだのに對して、忠實に見た儘、聞いた儘を寫生せよと説いて、自然主義の機運を拓いた人である。(中略)「比叡の鳥も自然主義文學の代表作として、寫生文の好適例として評判のある一編である」と述べて居らるゝが、是はとんでもない間違ひであらう。何となれば、一體寫生文は自然主義の文學とは別系統である。寫生文を唱へた一派の系統は、後に餘裕派文學となつて自然主義文學に對抗してゐる。「自然主義の機運を開いた」といふことについては、絶對的に否認は出来ない。何となれば、文の修飾を排して、眞を寫さうといふ點に於て兩者は似通つてゐるし、又互に何等かの影響を受け合つたこととは想像に難くないからである。しかし自然主義とは單に文章の上に就て言つてゐるのではない。文體論ではなくて、文學の本質に觸れてゐる。寫生文は外面生活の表現に止まり自然主義は内面生活の表現であつて其處に自ら區別がある。決して混同してはならない。野澤氏が、「比叡の鳥」を以て「自然主義の代表作として評判のある一篇

である」と云はれたのはどうしても肯定するわけに行かない。これは前に述べたやうに友納氏も言つて居られるが、兩氏の見解は、誤つてゐて、しかもその誤りが一致してゐる。國語教育に於て、文學的觀方を取入れて居られる兩氏の事だから、自然主義と寫生文との區別は知つて居られる筈だが或は何かの感違ひではなからうかと思はれる。

二六 渡り鳥 (高等小學讀本卷四、第五課)

評 論

新讀本に此の教材を取入れたことは、誠にうれしい、いゝ文である。同じ動物を書いたものであり乍ら、前課箋虫とは非常に趣の違つた文である。前課に於て、私は技巧の文だと云つたが、それに對しこれは無技巧の文といふ事が出来よう。前課では、説明に工夫はあるが、それは箋虫に對する興味を惹かうとする爲めのものである。此の文は其の點では別に特異さはないが、渡り鳥の特徴を一々よく捉え、極めて自

然な態度で書いてある。表現と作者の心がピッタリ合つてゐる。

一體國語讀本の文は形だけは大概子供の書いたことになつてゐる。しかもそれらの多くは大人らしい拙さを曝露してゐる。所が此の文は大人が書いたものである。しかもその大人は、自分が幼い七つ八つの頃の觀察を基として書いてゐる。だから觀察が自然で、文全體に生々うぶくしさが感ぜられる。先づ作者は「私たちが七つ八つの頃には、そろ／＼秋が更けて來ると、晴れきつた空を毎日の様に雁が渡つた」と云ひ、それについて「私たちはそれを見かけると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を仰ぎながら「雁よ、竿になれ。……」と、其の長い行列が漸次に雲の中にもじみ込んでしまふまで、聲をからして叫んだものだ。」といつてゐる。是丈の言葉の中には、餘程深い作者の感慨が含まれてゐる。私共は先づ「吹きさらしの野路に立つて」の一句に注意しなければならぬ。そして次に十五頁の二行「めつたに見られなくなつた」といふ言葉を見逃してはならない。即ち、作者が「吹きさらしの野路に立つて」と書く時には、同時に「今はもうめつたに見られなくなつた」といふ考へが働いてゐた事がわかる。さうして、此の一段で、作者が深く幼時を追懐してゐることを感ずるのである。

しかも、「吹きさらしの野路に立つて」といふ句には、作者の幼時の様子があらはれ次の「空の一方を仰ぎ乍ら」でその姿が一層明に思ひ浮べられるのである。併し私は更によく、作者が幼時の記憶をはつきり呼び起してゐるのを證するに足る表現を見るこゝとが出来る。それは「其の長い行列が漸次に雲の中ににじみ込んでしまふまで、聲をからして叫んだものだ」の一節である。これは、決して大人の知的な観察からは生れて来ない。子供の時分に見る卒直な感じである。成る程、此の「にじみ込んで」といふのは大人の言葉であるかも知れない。しかし、その感じ方は決して大人のそれではないと思ふ。私は此の一節だけでも、立派に此の作品は、作者が生活から深い印象を得て書いた文だと断定してもよいと思ふのである。だから、此の文は、全體に亘つて、作者の感慨が籠つてゐる。しかも表現が極めて自然であるから、四方からじわ／＼と締めつける様な力を持つてゐる。「秋の彼岸が過ぎて、そろ／＼日影が黄が、つて来ようといふ頃、私たちは、どうかすると暖い日の午過ぎそこの木立で甲高いもの聲……」は、よく時節を表してゐる。「そろ／＼日影が黄色が、かつて来ようといふ頃は面白い。作者が同じ時節を、一方には日影を「黄色が、かつて来ようといふ」といひ

一方には夕日を「黄いろい」といつたのは、事實に於ては認めらるゝが、何だか時の感じを混乱させる。が兎に角秋の彼岸過ぎの感じはよく出てゐると云はねばならない。「づぬけて高い楡の木に」は楡の木を表してゐるよりもむしろもすを表現したのであるが、此の邊のもすの様子は左程にうまいと思はれない。「黄いろい夕日を受けて、羽莖が金のやうにきら／＼してゐるのが見える」は少し大げさに言ひすぎた様でもあり「言ひやうのない強い健かな氣持が胸に流れるのを覺えた」はぼんやりと想像は浮んで来るが、はつきりしない。勿論非常に拙いのではないが、もすの描寫はすぐれたものではないやうだ。

けれどもその次のひたきの一段は、誠にすぐれた此の一篇の中でも又一段とすぐれたものであると思ふ。作者は「次にはひたきが来る」と書いてゐる。そしてひたきの特性を、非常にうまく描き出してゐる。「山家の午過ぎものうさうなこほろぎの聲も何時の間にか止んで、枯葉一つ寝返を打つまでがはつきりと耳に入る静けさの底に、何處からともなく微かな聲が漏れて来る。」此の一節は、最も生きてゐる。こほろぎの聲を「ものうさうな」と云つたのは、私には何だかしつくりしない、(私はいくらか哀調

を帯びてゐる様にきくが、しかしそれらの聲が何時となく止んで」といふ句について「枯葉一つ寝返を打つ音までがはつきりと耳に入る静けさの底に、何處からともなく微かな聲が漏れて来る」とあるのは、直接には静かな様をあらはしたものであるが實は、これによつて次のひたきの様子がはつきりとなるのである。そしてその次の「すると木蔭の萑畠か何處かで餘念もなくせつせと仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顔を上げる」は一方には時をよく示してゐるが、一面には亦よくひたきの特性をあらはしてゐる。此れは無論表面上は農夫を描いてゐるが、實は此の農夫がひよいと見るとつい鼻先にある枝からひたきが逃げて行つたといふので農夫よりもひたきを描いてゐることを忘れてはならない。此の邊は表現は實に自然で所謂無技巧の技巧になつてゐる。殊にひたきを「枯葉の様に、小鳥がついと身をそらしていつてしまふ」と描いたのは、實は微妙な表現であると思ふ。斯かるすぐれた描寫の後に作者は「それがひたきだ」と言つてゐる。ひたきに就ての説明は、只此の「それがひたきだ」と前の「次にはひたきが来る」の二箇所だけで、後はすべてが描寫になつてゐる。そして描寫だからこそ、此の處が力をもつてゐるのである。此の鳥のことを「まるで悲哀を懐いて

ゐる人のやうに」といつたのは、必ずしも當を得たものではないと思ふが「大抵は連に離れて唯ひとり出て来る」や「そこらの小枝に止ると、ひよくりく」と軽いお辭儀をして」は實にひたきの特性を表はしてゐる。

四十雀の所では「まるで時雨でも降るやうに、細かい羽音がさつと空をかすめて聞える。……」とか「めまぐるしい程すばしこくそこらをつゝき廻しながら、緑色の背をそらし、柔かみのあるまるい胸を見せて」といふ様な面白い所もあるが「銀の鈴を振るやうな、透きとほつた聲」は、あまり妥當でないと思ふ。雛の描寫などは相當面白ものである。

ひたきの次に描寫のうまいのは、やつぱりみそさといであらう。殊に「こつそりと附近を忍ぶやうにして来る」に於ては優れた作者の觀察眼に敬意を表せずには居られないが、更に山近い田舎の山家のちいさんばあさんとみそさといとの描寫は、如何にも山家らしい氣分を浮び出させ、田舎ののん氣な生活を想はしめ、みそさといのすむ環境をよく表してゐる。

ほゝじろの所で「獨者のほゝじろが灰色の胸までぐしよぬれになつて、しよんぼり

とそこらの木に止つてゐる」といふのも、如何にもほゞじろの特徴を捉えてあるが、
茲は原文に「そこらの小枝に止まるなり、何か眼に見えぬ昔馴染をでも招くやうにひ
よくりく」とあるが、それは却つて讀本の文の様に「何か眼に見えぬ昔馴染をで
も……」は、ない方が生々となつて来る。兎に角此の文はすぐれたものである。

二七 峠の茶屋 (高等小學讀本卷四第二十課九)

評 論

漱石の文中でも、此の一節は特に有名な所である。中等學校の讀本や、課外讀本、
文學讀本といつた様なものには、殆んど採用されてゐるといつてもいゝ位だ。そして
殆どどの讀本でも、草枕の中から是丈が切り取つてある。私は、此の文を草枕で、初
めから讀んで来て、此處を讀み更に、最後の天狗岩のつゞきを讀むよりも、此の讀本
に出てゐるだけを、獨立した文として讀む方が却つて面白味を感じる。此の文の一番
後は「老婆の指さす方に、あらけづりの柱の如くそびえてゐるのが天狗岩ださうだ。」

で切つてあるが、原文では更に「余はまづ天狗巖を眺めて、次に婆さんを眺めて、三
度目には半に兩方を見比べた。晝家として余が頭のなかに存在する婆さんの顔は高砂
の婆と、蘆雪のかいた山姥のみである。……」と續いてゐるが、そこまでつゞけて讀
むと却つて理窟つばくなつて、餘情を失ふ様な感じがする。だから、私はこれを、原
文とは獨立した一篇として、此の文のことを少し述べて見よう。

先づ「おいと聲をかけたが、返事が無い」にはじまつてゐるのが面白い。我々の
頭には、直ちに田舎らしい情調が浮んで来る。即ち讀者は先づ此の一句でもつて、作
者の心持に引込まれてしまふ。そして「軒下から奥をのぞくと」いふので讀者の頭には
田舎の家の様子が稍具體的に描かれる。ひよつと見ると、それよりも「すゝけた障
子が立てきつてある」の方が餘程田舎らしい感じを伴つてゐる様である。が「軒下か
ら奥をのぞくと」といふのには、作者の姿と、店の様子とが同時に寫つて来て、生活
を暗示してゐる。「すゝけた障子が立てきつてある」も無論、その生活をあらはしては
ゐるが、此の句單獨では、田舎らしいといふ感じはしても、田舎の茶屋の感じはさう
強くない、文に深さがあるといふ意味は、此處でも解るかと思ふ。しかし、此の二句

は離して考へらる可きものではなく、二句をつゞけて讀んではじめて場面がはつきりとなるのである。「五六足の草鞋が寂しさに庇からつるされて、屈託げにふらりくと揺れる。下に駄菓子箱が三つばかり並んで、側には小錢が散らばつてゐる。」も無論前からつゞけて讀んで来て、総合的に田舎の茶店の様子があらはれるのであるが、是等の表現は、皆「軒下から奥をのぞくと」によつて統一されてゐるのである。「軒下から」といふ言葉は、田舎の茶店の軒の低いことをあらはすものであり、「のぞくと」の一語は、作者が此の店に這入る時の全體の様子をあらはすのである。「五六足の草鞋が寂しさに庇からつるされて、屈託げにふらりくと揺れる」はなかなかよく書けてはゐるが「寂しさに」はなくつても「五六足の」と「屈託げに」で寂しさうな様子はよくあらはれてゐる。「下に駄菓子箱が三つばかり並んで、側には小錢が散つてゐる」には田舎の茶屋らしい様子があらはれてゐる。

「土間の隅に片寄せてある白の上にふくれてゐた鶏が、驚いて目をさます。」にもよく田舎らしい氣分が出てゐるが、中でも「ふくれてゐた」は雨の降つた日の鶏の様子をよく現はした言葉である。「敷居の外の竈が今しがたの雨にぬれて、半分程色が變つて

ゐる上に、眞黒な茶釜が掛けてあるが、土の茶釜か銀の茶釜かわからない。」には田舎らしい生活状態が描かれてゐる。敷居の外に竈があるのは、普通の田舎ではなくて、餘程の田舎であることがわかる。しかも「眞黒な茶釜」は此の茶店が餘程古くからあることをもあらはしてゐる。「返事がないから、無断ですつとはいつて、牀机の上へ腰を下した。」は單に此の作者の動作を述べたのみではなくて、此の時の氣分を表してゐる。即ち作者はすつかり田舎に来てゐるといふ氣分になりきつてゐる。作者は、鶏がにげたのを「まるで自分を狐か犬かのやうに思つてゐるらしい」といつてゐるが、これは鶏をにくく思つたのではなくて、此の田舎らしい氣分に對してむしろ面白く感じてゐる心持であらう。「牀机の上には一升掛程な煙草盆が閑靜にひかへて、中にはとぐろを卷いた線香が日の移るを知らぬ顔で、頗る優長にくすぶつてゐる。」も面白い觀察であるが、稍説明に陥つてゐる。一體漱石の文は、説明しすぎる傾きがある。前の「寂しさに」もさうだが、こゝの「頗る優長に」もさうだと思ふ。こゝでも、煙草盆の様子を「閑靜にひかへて」といひ、「日の移るを知らぬ顔で」といひ、更に「頗る優長に」と重ねてゐるが、私は此の「頗る優長に」はとつてしまつていゝと思ふ。即ち「日

の移るを知らぬ顔で」が立派にその様子を表現してゐるかと思ふ。その次の「烈しかった雨は次第に収まる」には前の「竈が今しがたの雨にぬれて」に對して時の矛盾がある。即ち「竈が今しがたの雨にぬれて」といへば「つい以前まで雨がふつてゐたが今はもうやんでゐる」と感ぜられるのに、その後の叙述に「烈しかった雨は次第に収まる」とあるのは少し變である。「烈しかった雨は次第に収まる」は「次第」に収りつゝあるのであつて、まだ少しは降つてゐる様に思はれる。

それから「暫くすると、奥の方から足音がして、すゝけた障子がさらりとあく」は別に大したこともないが、たゞ「すゝけた障子」が「さらり」とあくはあまりしつくりした感じではない。一體「さらり」といふ語は、何の引かゝりもなくうまい工合に障子が溝をすべる感じである。こゝでも、婆さんが田舎の人故に強く引あけたから障子のすべりはよかつたかも知れないが、「さらり」といふのはむしろ新しい障子などの氣持よく滑るやうな感じがする。「中から一人のばあさんが出る」は甚だ面白い。何の造作もなく書なぐつた様な言葉であり乍ら、これではあさんの性格が稍うかゞはれる。前の「さらり」といふのは、作者が、此のばあさんのことを考へてゐたから出て來た

言葉かも知れない。それは後に、高砂の能を見た時のことを書き、ばあさんがその能のばあさんに似てゐるといつてゐるのでも、作者が此の場面を劇的に感じてゐたかはわかる。さうすると此の「さらり」は障子をあらはしたものでなくて、婆さんの動作をあらはした語だとも思はれる。「どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた」以下「返事が無いのに、牀机に腰を掛けて、何時までも待つてゐるのも面白い。」までは、例によつて作者があまり説明しすぎてゐる。これらは、作者の文に對してむしろ讀者が考ふべき所である。此の説明がなくつても、讀者の方には、此のことがよくわかる。そしてない方が却つて讀者には「都とちがつてゐる」ことも「返事もないのに作者が牀机に腰かけてゐるのが面白い」こともよくわかる。つまり作者は「讀者の領分」にまで立入つてゐる。しかし漱石のでは、斯うした所に獨自な所がある。それが此の作者の特徴である。斯く言へば然らば此處では何故いけないかと疑ふ人があるかも知れないが私は初めに此の文を全然獨立した文として述べると云つた。所が此の文は草枕一篇の中にあつては、重要な位地を占めてゐるといふ譯ではなくて、むしろ挿話の地位にある。そして人を引きつける箇所は多く此の理窟つばい所にある。けれども此處では

さうたいしたこともない様だ。

會話の所は、地の文程にうまいとは思はないが、しかし如何にも自然に推し移つて行つてゐる。「おばあさん、此處をちよつと借りたよ。」に對し「はい、これは一向存じませんで」はなか／＼面白い言葉である。都會あたりの人だと「はい、どうぞ」とか「ゐらつしやい」とかいふのが普通であるが、此のばあさんは、商賣上のお客様に對する氣持よりも、待たしてすまなかつたことを氣にしてゐる。此の一語は素朴な田舎人の氣持を最も自然に現してゐるものである。「あいにくなお天氣で、さぞお困りでござんしよ。お／＼、大分ぬれなかつた。今火をたいて乾かして上げましよ。」にしても何處までも相手を中心にして物を言つてゐる。作者の言葉はばあさんほどはうまくないが、それでも如何にも自然である。「其處をもう少し燃しつけてくれ／＼ば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」は恐らく作者自身の性格を現はしたものだらう。殊に「どうも少し休んだら寒くなつた。」などは卒爾であるが罪がない。その次の「こゝこゝ」と駆出した鶏は、焦茶色の壘から駄菓子箱の中を踏みつけて、往來へ飛出す。雄の方が逃げる時、駄菓子の箱の上へ糞をした」は益々田舎の茶店ら

しいが、中でも「駄菓子箱の中を踏みつけて」と「駄菓子の箱の上へ糞をした」とは此の店のばあさんの性格、つまり田舎人らしいのんきさ、鈍感さといった様なものをあらはしてゐる。しかし「駄菓子箱の中」といひ「駄菓子の箱の上」といふのは駄菓子箱の様子をはつきりあらはしてゐない感じがするが、さう大したことではない。「茶の色は黒く焦げてゐる底に」といふ茶碗の様子も、又此のばあさんの生活をあらはしてゐるのである。

後の方の會話は、前の會話程に生きてはゐない。こゝでは又時間の経過が、どうも疑はしい。作者が茶店に這入つてからまだ長くもならないのに、雨が止んだり降つたりする様な氣がしてどうも變である。ばあさんは「さつきの雨で」といひ「いゝ工合に雨もはれました」といつてゐる。これではまるで夕立か何かの様で春雨らしくもない。これでは恐らく作者としては「天狗岩」のことを書かうとする心があつた爲めに用ひた技巧であらう。だが此の最後の一節は、甚だ面白くて、次を読みたくなる。しかし、この次をつゞけて讀むと、却つて面白くないことは前に言つた通りである。此の作品を讀んで感じられることは、作者が非人情美を見て行かうとする態度のあらは

れてゐることである。即ちばあさんの人情を描かうとせず、ばあさんの何もかまはぬ性格を出さうとし、鶏の糞のことなども實生活に照して見ることなくして、田舎らしい生活を客観的に見て其處に面白さを認めようとしてゐることである。だから吾々から見ると非常に面白く、よく描けてゐるとは思はれるが、深く心に残るやうなものではない。

— 終 —

發行所	現代讀方 教育の破壊と建設		昭和二年十一月十八日印刷 昭和二年十一月二十日發行
	著作者	萬福直清	定價金參圓
東京出版社	發行者	富永直樹	
	印刷者	東京出版社印刷部	

東京市牛込區甲良町二十三番地
電話 牛込區四三四番
東京一七〇五二番

社元一

東高師 萬福直清早大文科有富郁夫共著(男女兼用)
前教官

(評好)

理解・鑑 文章の生命
賞・批評 に徹する
高等小學讀本精義

卷一・二・三・四・定價各金參圓也・送料各金拾貳錢

卷四は十月十日發賣しました。これで高等小學讀

本教師用は完結しました。本書に類似した教師用書

は非常に多いが、其の文章を説くこと皆悉く平凡で

淺薄で、しかも其の鑑賞は抽象的で不徹底です。之

に反し本書は文章を説くこと高くして深く且つ其の

鑑賞は具體的である。各課學習指導、原據、參考、

補充材料等を附す。

東京高師前教官 萬福直清 著

(刊新)

現 讀方教育の破壊と建設

四六版洋裝箱入
定價貳圓五拾錢
送料金拾貳錢

文章觀の根本的大改造——尋常小學國語讀本並に高

等小學讀本各卷の文學的文章を中心として現今の讀方教育論者一八

波、垣内、千葉、秋田、友納、野澤、河野、大杉、芝野諸氏の文章

觀を鳥瞰的に列記して其の平凡淺薄なるを深刻に評論し、しかも具

體的に鑑賞を既き讀方教育者の文章觀を高め深めることに努力した

近來の一大快著である。

東京市牛込區甲冑町二三

發行所 東京出版 社

總發東京一七〇五三番



